

指紋法を植民地主義と冷戦のなかに位置づけるということ Situating Fingerprinting within Colonial and the Cold War History

板垣 竜太

ITAGAKI RYUTA

同志社大学社会学科

Doshisha University, Department of Sociology

キーワード

識別 暴力 東アジア 満洲 在日朝鮮人

Keywords

identification; violence; East Asia; Manchuria; Zainichi Korean

Quadrante, No.20 (2018), pp.9-15.

目次

1. 指紋という問題
2. 本書の意義
3. 指紋による個体識別と「おまえは誰だ！」のあいだ
4. 「移動する身体」とは何か
5. ポスト大日本帝国とく東アジアの冷戦>

1. 指紋という問題

まず私自身の自己紹介といえますか、「指紋」という問題に関わってきた経緯から話をはじめたいと思います。というのも、私にとってこの主題は、単なる「アカデミック」な関心事ではないからです。私は学部時代の最終年度ぐらいから朝鮮半島研究の世界に入りました。指紋押捺拒否運動は、私がまだ小さい頃の話なので、リアルタイムには記憶がなく、朝鮮半島研究に関わるようになって、ようやく指紋押捺拒否運動が少し前の時代にあったことを知ったような次第です。ただ、それを自分自身の研究対象にするといったことは当時考えていませんでした。

私は1999年から2001年まで韓国にフィールドワークを兼ねた留学をしました。韓国では90日以上滞在する外国人は、指紋を登録して「外国人登録証」^{オモツキョ}を発行してもらわなくてははいけません。当時、梧木橋というところにあった出入国管理事務所に行って、そこで指紋を捺しました。黒いインクで十指すべて捺すのですね。まず「回転指紋」

という、ぐるっと指を回しながら一本一本採ります。その後に五本の指をまとめて「平面指紋」として捺す、というやり方でした。手の指紋をすべて回転と平面で採るのですから、合計二十指分を登録することになります。そういうことをやることは知識としては当然知っていたんですけども、実際受けてみると当然気持ちのいいものではないし、韓国の指紋制度とは一体なんだという疑問も湧いてきました。つまり在日外国人の指紋押捺がイシューとなっていた頃には韓国政府も批判していたはずなんですけれども、一方の韓国は国民も外国人も等しく指紋を採ってきたわけです。その意味で、指紋をめぐる「差別」はないのですが、だからといってどうもすっきりしません。

ちなみにインクで指紋を採ると手が汚れます。担当職員はトイレトペーパーを渡して、それで拭けと言うのですが、拭っても綺麗になりません。どうすればいいのかと聞くと、あそこにトイレがあるからそこで洗うようにと言われました。さらに私の知的好奇心ですが、帰国したらこの指紋はどうなるのかと聞くと、これは永久保存だからあのロッカーにしまっておくのだとのことでした。じゃあ死んだらどうなるかというと、それでも永久保存だと言われ、なぜそんなことを聞くのかと逆に問いただされました。

ちょうどこの1999年という年は、韓国では「住民登録証」の切り替えの年でした。韓国民には「住



10 指紋法を植民地主義と冷戦のなかに位置づけるということ

民登録証」が満 17 歳から発給されます。それまでラミネート式だったのですが、この年にプラスチック式に切り替えが進められていました。それに対して、非常に小さなものではありませんでしたが、韓国で反対運動が起きていました。インターネット上で名前を明かして、「自分は拒否します」と宣言して、住民登録証の切り替えを拒否する、あるいは指紋押捺を拒否するという運動でした。そうした拒否宣言というやり方自体は、実は在日の指紋押捺拒否運動のやり方を借りてやっていたのですね。私もそれに共感をもってコメント欄に「応援します」といったことを書いたりしました。

その頃、この運動体のなかからドキュメンタリーを制作しようという人たちが出てきました。李マリオという監督、若くて私とあまり変わらない年齢だったと思いますけれども、彼が私のコメントを見て接触してきました。私は、そもそもこの問題を単に「韓国の問題」としてだけ考えたくはありませんでした。それを満洲の指紋という問題や——高野さんの本の一中心ですけれども——朴正熙がかつてそこにいたこととか、その朴正熙が全面的な指紋押捺制度を導入したとか、そういう点については既にある程度分かっていたので、ドキュメンタリーに協力するにしても、そのような視点がほしいですねみたいなことを言った記憶があります（実際、できあがったものにはそのような内容が含まれていました）。私は調査のためにソウルから田舎に引っ越していたのですが、そこまで撮影しにも来ていました。

映画が完成したのは 2001 年でした¹。失礼な話ですが、作品を見るまでは、運動体のドキュメンタリーなので、実はそれほど期待していませんでした。でも、実際見るとこれがなかなかよくできていて、字幕をつけて日本に紹介したいと思いました。それで小倉利丸さんという監視社会論などをやっていた研究者に相談したところ、それはいいタイミングだと言われました。ちょうど 2002 年に日本で「住基ネット」（住民基本台帳ネットワーク）が稼働するというタイミングで、それに関

して住基ネット反対運動が少しずつ盛り上がってきている状況だったのですね。そこでその運動体の資金も得ながら、私が字幕原稿を書いて、字幕をつけてもらって、その映画の上映運動を展開しました。映画自体は韓国の住民登録証に対する反対運動の映画なんだけれども、それを上映しながら、日本の住基ネットの問題を論ずる講演をするという、ビデオと講師をワンセットで各地に派遣するという形式で運動を進めました。私も派遣されたことがありましたが、一番全国を回っていたのは自治労におられた白石孝さんでした。

住基ネットの反対運動には、それまであまり関心もなかったのですが、関わってみると、実にいろんな人たちが参加していました。例えばトランスジェンダーの運動をやっているような人たちも参加していて、住基ネットは男か女かどちらかでしかデジタルに管理されないということで、それに反発して運動に参加していました。中核派も来て、革マルも来て、そうすると自動的に公安もたくさんやってきたりもしました。

そういう場に参加していると、面白いなと思う部分が多々あった一方、違和感を覚えたところもありました。それは「国民総背番号制反対」というスローガンに象徴される部分でした。私としては、これを「国民」という枠に収めたくはなかったのですね。それで、日本での外国人に対する指紋押捺問題、韓国の指紋登録や住民登録証の問題と、日本で現在進行している住基ネットの問題とを何とかつなげられないか、と思って書いたのが「帝国の臣民管理システム」という論文でした²。

前置きが長くなってすみませんが、もう少し続けます。このグループのなかで「ビッグブラザー賞」をやろうという話になりました。ビッグブラザー賞とはイギリス発の運動で、監視社会の構築に貢献した人や集団に賞をあげるという、ブラックユーモアみたいな運動です。それで「ビッグブラザー・ジャパン」(BBJ)をやろうという話になり、合わせて国際シンポを開催しました。そのために編集した本が『世界のプライバシー権運

¹ ドキュメンタリー『住民登録証を引き裂け！』（李マリオ監督、2001 年）。日本語版はビデオプレスから販売した（2002 年）。なお日本での上映運動については拙稿「住民登録証を引き裂け！」ドキュメンタリー上映運動について『インパクション』130（2002 年）を参照。

² 拙稿「帝国の臣民管理システム：過去と現在」『現代思想』2002 年 9 月号。この論文はほぼ同じ時期に、「제국의 신민 관리 시스템: 과거와 현재」『당대비평』제 20 호（2002 年 9 月）として翻訳掲載された。

動と監視社会』です³。出版社側の意向で「プライバシー権運動」ということばが入って書名がやや分かりにくくなっていますけれども……。

このBBJのときにマレーシアからも活動家が来ました。インディペンデント・メディアをやっている方が来て、マレーシアのICチップ入りの国民カードの問題について話をされました。歴史も軽くお話をされていました。そこに私にとってはある種の既視感があったんですね。つまりマレーシアの住民登録制度の導入過程や背景と、韓国のそれがさまざまな面で似ていると思いました。それはイギリス植民地統治からマレーシアが独立していくプロセス、マラヤ共産党の動き、そこでの華僑・華人の動きに対する警戒心、そうした状況のなかで身分証制度が導入されていました。あるいは満洲の、いわゆる「集団部落」にも似た「ニュー・ビレッジ」が1950年代のマレーシアで作られていたことも見えてきました。そこで、あえてこれを比較する短い文章を書いたことがあります（誰も参照してくれませんが）⁴。

こうした過程で痛感したことは、1980年代の日本の指紋押捺拒否運動のなかで出されたさまざまな文献や研究の水準の高さでした。そこには多くの問題が既に出尽くしていました。それも最初から日本のなかだけで問題が設定されていない、いわゆる満洲指紋の問題も出ていましたし、GHQ/SCAPの指紋制度の関わり、あるいはアメリカ合衆国と日本の制度との関わりなどが浮上していました。運動それ自体が在日コリアンたちを中心にしながらも、そこにさまざまな国籍の人たちが連なっていって展開されていたわけですね。運動が、いわばトランスナショナルに（という言い方がふさわしいかどうかわかりませんが）展開していた、そのなかでかつてのトランスナショナルな歴史とでもいうべきものが紐解かれていたと思います。逆にまた、そのような文献で描かれたものが、また運動に一種の想像力としてフィードバックしていく、といったことがあったように思います。そこで、まさにその点をテーマに文

章を書いたこともあります⁵。

長々と自己紹介のようなことをしたのですが、このように、指紋に関しては「研究」というものとは少し違うところに関わってきたという経緯があります。要するに、そういう観点から高野さんの本を読みますということを言うために、ここまで長々とお話しさせていただきました。

2. 本書の意義

私にとってのこの本の意義は、三点指摘することができます。

まず、以前から論じられてきた大日本帝国あるいは大英帝国と指紋制度との関係について、よりコンパクトな手に取りやすい形でまとめてくれたという点です。金英達キム ヨンダルさんの『日本の指紋制度』や、あるいは裁判闘争をやっていた団体が作成した『抗日こそ誇り』というような1980年代の指紋押捺闘争の真っ只中から出てきた先駆的な本があります⁶。これらはいずれも指紋に関して広く深く検討しているのですが、もうこれらの本は古本でもなかなか見られない稀覯本になっています。またそうした運動とは全く違った筋から、渡辺公三さんの『司法的同一性の誕生』が出されたことがあります⁷。渡辺さんの場合は、人類学的まなざしの歴史を系譜学的に紐解いていき、個体識別と人類学、いわばanthropo-metryとanthropologyの関係を辿る批判的作業から出てきたもので、そこからベルティオンとかインドの指紋、さらには満洲の指紋の問題へと展開していったものです。渡辺さんは執筆当初『抗日こそ誇り』のような報告書の存在をご存じありませんでした。その意味で運動とはだいぶ違うところから出てきた本ですが、いずれにしても高野さんの本は、この三冊に代表

⁵ 拙稿「指紋押捺経験をつなぐ：「お前は誰だ!」をめぐる政治と記憶」『大阪大学日本学報』29（2010年）および「指紋」板垣他編『東アジアの記憶の場』（河出書房新社、2011年）。

⁶ 金英達『日本の指紋制度』（社会評論社、1987年）。指紋なんてみんなで“不”の会編『抗日こそ誇り：訪中報告書』（1988年）。

⁷ 渡辺公三『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』（言叢社、2003年）。なお、同書についての私の評価については、書評「「おまえは誰だ?」をめぐる変奏曲：『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』（渡辺公三著）」『インパクション』136（2003年）を参照。

³ 小倉利丸・白石孝・板垣竜太編『世界のプライバシー権運動と監視社会』（明石書店、2003年）。

⁴ 拙稿「マレーシアの「MyKad」：韓国の住民登録制度と比較して」『社会運動』287（2004年）。

12 指紋法を植民地主義と冷戦のなかに位置づけるということ

されるような視点を引き継いで、それを推し進めたものと見ることはできると思います。

というのも、＜指紋と近代＞というかたちで「近代」をキーワードに単純に事実をつなげるだけであれば、日本の指紋制度自体はドイツの「ハンブルク式」から来ていたわけで、ドイツから日本へというラインで語っても本来よいはずですね。それをあえて英領インドー満洲一戦後日本をつなぐ視点というのは、まさに金英達さんや『抗日こそ誇り』のような仕事のなかで、あるいは渡辺さんの議論のなかで出てきたものです。この植民地ー宗主国間の関係に注目するという視点は、こうした仕事の延長線上にあると思います。

二番目に、この本の中心には満洲指紋に関わる記述がありますが、「満洲国」の支配者集団のもっていた中国人労働者に対するまなざしと、それが指紋制度の広範な導入へと帰結していったプロセスについて、これまでの研究等ではまだ分かっていなかったところが明らかになったと思います。特に第5章「労働者管理から国民登録へ」は、これまで断片的にしか見えていなかったところがよく見えるようになったと思います。中国人労働者が一斉帰国するところとか、寄留法を導入してみたけれど弥縫策でしかなかったとか、あるいは国民手帳の導入過程やそれが実際ほとんど普及していなかったこととか、こういった1940年代前半の指紋をめぐる状況が一層明確になりました。

最後に、第6章と第7章も注目されます。特に1949年から1951年ころの日本で、警察主動の県民指紋登録とか、住民登録法（1951年）とかが、外国人登録制度と同時期に出てくるわけです。それらが一体どのようにつながっているのかと前から気にはなっていたのですが、本書ではその点が一部浮かび上がってきています。この点については後述します。

以上の点が、本書の意義であると思います。

3. 指紋による個体識別と「おまえは誰だ！」のあいだ

ここから先がコメントになります。率直に言えば、いま申し上げた部分は「おっ」と思ったのですが、それ以外のところはあまり新鮮な感じがしませんでした。今日は若手研究者をエンカレッジ

したいと思って来たのですが、ただ褒めるだけではエンカレッジにはならないという観点から、違和感を覚えた点を中心に話そうと思います。

本書では、十指指紋法と一指指紋法を、識別のテクノロジーとしてはっきり区別して話を進めています。「日本で一指指紋法が全国の警察で実施されたのは1953年のことである」（7頁）という観点から、それ以前の一指の押捺というのは識別の機能を果していたのかどうかは怪しいといった調子で書いています。その結果として、それ単独で個体識別のテクノロジーとして有効であったかどうか自体が定かではない一指指紋については、本書は積極的な研究対象から外していると思います。この点において、特に満洲に関して言えば、個体識別可能かどうかにかかわらず指紋押捺の歴史を描き出した『抗日こそ誇り』とはだいぶ観点が異なると思います。では、一指指紋法が識別法として本格導入される以前に一指だけを捺させたのは、何の意味もなかったのでしょうか。

たとえば、いわゆる「集団部落」の出入りの管理で使われていた指紋入りの「居民証」については、この本では「この時期はまだ一指指紋の分類・検索システムが確立していなかったことを考えれば、「居民証」の指紋が個人識別に効力を持ったか否かは疑わしい」（244頁）ということで、検討の対象からほとんど外されています。ただ、だからといって「居民証」が個体識別において効力をもたなかったということは全く意味していないと、私は考えます。これに関しては『抗日こそ誇り』の第4章にかなり詳しく書かれています。いわゆる「匪民分離」、抗日ゲリラとそうではない一般民衆を分離する政策、より具体的にはゲリラが食糧を調達できないようにする、あるいは隠れ家がないようにするという政策の一環として、平均数十世帯～百数十世帯の「集団部落」が人工的につくられました。それがまず「間島」地域、すなわち今の延辺地域から中国東北部各地へ広がっていきました。その出入りの識別に使われたのが「居民証」です。居民証には顔写真が貼ってあり指紋が捺されていました。その居民証を使って、門の出入りを警察や自衛団がチェックする様子が『抗日こそ誇り』には克明に書かれています。数十世帯とか百数十世帯くらいですので、実は顔の識別が

可能です。門番に当たる人は、その程度の人の顔くらいは認識できてしまう数なので、そういう意味では、「見慣れた、既にわかっている人には、そんなに厳しくなかった」（『抗日こそ誇り』64 頁）一方で、「その「居民証」がなければ日本人は勝手に処置したわけです。殴ったり、殺したり……」

（同、63 頁）という状況であり、この規模の村では、一指指紋の識別と選別の効果は十分機能していたのです。それは、当時の住民が「指紋を押す理由は、他の印章は変る事があるでしょ、指印（指紋）は絶対死ぬ迄変わらないでしょ、だからそれを押しました」（同、63 頁）とインタビューで答えているように、終生不変性を認識していることからしても、押捺させられること自体が、死ぬまで監視のネットワークに組み込まれることを自覚させられる権力作用を有していたと言えるのではないのでしょうか。ですので、指紋法というテクノロジーは、それだけを抽出して捉えられるものではなくて、それがいかなる暴力装置および権力の布置のなかに埋め込まれて、選別的な暴力と権力のツールとして機能しているのか、ということが描き出されなければならないと思います。

それに関連して、指紋法は現代的に言えばバイオメトリクス（生体認証）の一つということになります。ただ、バイオメトリクスだけを特別視するのではなく、いわゆる身分証や ID カードの類、あるいは登録簿や戸籍などの名簿の技術など、身体に直結しない識別と管理の技術のほか、「保甲制度」に代表されるような小分けして組織化したうえで集団的に監視するようなやり方、さらに言えば個体識別できなくても集団の分類・識別・選別ができればいいのだということも存在するわけで、そうしたことも含めて、暴力と権力の構造を捉えていくべきではないかと思っています。

4. 「移動する身体」とは何か

この本のサブタイトルに「移動する身体の管理と統治の技法」とあるように、「移動する身体」は本書のキーワードです。本書では「移動」を「定住」と対比しながら、「そもそも近代は、移動する人びとの把握と管理に奔走し、格闘しつづけた時代だった」という観点から、「指紋法はこうした移動する人びとを、国家や植民地統治者が把握・管

理可能な状態に置くための統治の技法として誕生し、使用されてきた」（8 頁）としています。ここで私が思うのは、指紋導入において焦点化されたのが「移動する身体」一般だったのか、という点です。日本人もたくさん「移動」している、そういう状況のなかで、「移動」する人であっても「従順な身体」であつたら登録簿だけで歯が立たないといった話になっただろうか。逆に「定住」していたとしても「反抗する身体」だったら、それは指紋導入に際して構成される権力と同様なものが作用しなかっただろうか、と思うのです。

その点において、まなざされる側、管理される側の、民衆側の動きや経験についてもっとと言及があつたらよかったのにとおもいます。この本の 1945 年以前の叙述ではほとんど数字として、あるいは政策推進側の認識として表出される存在としての民衆が登場しているようです。それも、主として当時活字化された資料に依拠して語られていて、内部資料は用いられていないように見えます。そうした視点や方法では見えてこないものがあります。例えば「1924 年に撫順炭鉱で開始された労働者の指紋登録は、満洲の他企業にも急速に普及していった」（71 頁）と書いています。その一方で念頭におくべきは、1926 年 10 月の満蒙毛織での指紋法導入に際してストライキが起こったことに対して、会社側が参加者全員を解雇して、新規に条件を飲んだ労働者のみを雇用して「解決」といったことがありました（『抗日こそ誇り』、45-46 頁）。こういうさまざまな抵抗が実際あったことも含めて、単なる人口移動現象ではない民衆の動きは外せないのではないかと思います。

そのことは、中国東北部において「戦時」「平時」とは何だったのかということにも関わります。言うまでもなく「日中戦争」は単純に 1937 年に「はじまる」ものではありません。さらに 15 年戦争論のように 1931 年の満洲事変から「はじまる」と簡単に線引きできるものでもないと思います。1910 年代より「間島」を中心とした中国東北部は朝鮮人独立運動の活発な地域であり、だからこそ 1920 年には間島虐殺事件が引き起こされたりもしました。中国国民党の「北伐」も 1920 年代に展開されましたし、1930 年にはコミンテルン指導下で中国共産党に入党した朝鮮人活動家による暴動が間島

14 指紋法を植民地主義と冷戦のなかに位置づけるということ

で起きています。そうした点からすれば、中国東北部は単純な「平時主権国家」モデルにはおさまらない場だったと思います。そこにおいてこそ指紋法が浮上してきたと思います。

もちろんこの本が労務管理とか労務動員に焦点を絞ったことであらためて見えてきたものがあることは確かです。例えば「移動」といっても「職場間移動」のような問題を当時の労務管理において相当重要視していたといった点は、こういう観点抜きには明らかにしえなかったと思います。けれども、それだけであれば「内地」とか朝鮮でも、少なくとも 1937 年以降同様の状況にあったはずで、「不逞」なるものに対するまなざし抜きには、あいだに何も中間組織を据えないで直接個体を管理するという指紋法への動機づけにはならなかったのではないかと、そのように思います。

5. ポスト大日本帝国とく東アジアの冷戦>

戦後の部分に入ります。先に言ったとおり、1945 年以降の日本における指紋制度に関する本書の記述によって、警察主導の県民指紋登録と住民登録法の制定過程については、これまでよりも諸事実が明確になったと思います。それを「植民地主義の忘却と継続」(195 頁)という観点から見ることで自体はいいと思うのですが、その一方で、中国の国共内戦、^{チンジュ}済州 4.3 事件、麗順事件、朝鮮戦争といったいわば「熱戦」をふくむく東アジアの冷戦>というコンテクストにさほど注目が向けられていないこと、意識はしているのかもしれないが少なくとも叙述が展開されていないのは物足りない感を生んでいると思います。なぜ 1949 年から 1951 年という時期に、警察の県民指紋登録や指紋を含む住民登録法案が出てきたのかということを考える際にこの点は不可欠であるように思われます。その時期においてこそ入管制度や外国人登録制度と、日本人向けの制度との関係が絡み合ってくるのではないかと思います。そこには日本政府だけではなく、米軍であったり英連邦軍であったり、日本列島と朝鮮半島にまたがった「不逞」の「移動する身体」に対する占領軍のまなざしが介在していたと思いますし、そこをうまくつなげていく必要があります。以下、これまでの諸研究から分かっていることをまとめてみます。

まず外国人登録令(以下、外登令)(1947 年 5 月 2 日發布)ですが、1946 年 9 月段階で英連邦軍から米第 8 軍に対し、朝鮮人らの「密輸」行為に関連して、すべての外国人に対する ID カードの発行を提言しています⁸。その後、GHQ/SCAP と内務省がやりとりした結果、外国人登録令が發布されました⁹。

次に、この外国人登録令は、1950 年はじめから、書換義務違反や不携帯の罰則化など厳格化されました(1949 年 12 月 3 日改定、1950 年 1 月 1 日施行)。これについては、まず 1949 年 3 月に第 24 歩兵師団(広島)の米第 8 軍宛書簡で、「スパイ」「破壊活動家」の不法入国を調査するため針尾収容所に調査機関を設置するよう提案しました。それを受け、第 8 軍内で、密入国者抑止策強化のために外登証の確認・更新手続や検問所設置などの案が出されます。そして 7 月の SCAP と第 8 軍との会談において、日本政府が外登令により不法入国者を処罰できるようにするとともに、外登令を変更して常時携帯と切替申請義務、違反者の罰則規定を設けることに同意しています¹⁰。それが朝鮮連解散(1949 年 9 月)を受けて、一挙に制度化されたわけです。ここでも米軍の動き、意向、朝鮮人に対する不信感、こういったものが強く作用していたわけです。

出入国管理令(以下、入管令)(1951 年 10 月 4 日公布)と、指紋登録を含む外国人登録法(1952 年 4 月 28 日制定)の制定過程は、朝鮮戦争下で進みました¹¹。その内容をざっと紹介すれば次のとおりです。1951 年 1 月、SCAP 民事局がニコラス・コレア(Nicholas D. Collaer: 米移民帰化局、マッカーシズム最高潮期の新移民国籍法作成過程で関与した人物)を招致します(～1952 年 4 月)。2 月、コレアは入管庁宛ての書簡で、米国の入管・

⁸ Tessa Morris-Suzuki, *Borderline Japan: Foreigners and Frontier Controls in the Postwar Era*, Cambridge U.P., 2010, 90.

⁹ 大沼保昭「出入国管理法制の成立過程：1952 年体制の前史」『〔新版〕単一民族社会の神話を越えて——在日韓国・朝鮮人と出入国管理体制』(東信堂、1993 年〔初出は 1978 年〕)。

¹⁰ 金太基『戦後日本政治と在日朝鮮人問題——SCAP の对在日朝鮮人政策 1945～1952 年——』(勁草書房、1997 年)。

¹¹ ロバート・リケットと裁判の会「指紋押捺制度の背景」『思想の科学』100 号(1988 年 3 月; Morris-Suzuki 前掲書の第 4 章)。

登録行政や移民法について紹介し、登録外国人の指紋を中央指紋照合局・入管庁で分類保管するよう提案しました。これを受けて、日本政府は入管庁・警視庁を中心に指紋制度導入を検討しました。8月になると、日本政府は衆議院行政監査特別委員会で「外国人登録証明書に指紋を徴する制度」という報告書を発表しました。この時点でもなお日本政府は警察に指紋を管理させてがっていましたが、さすがに GHQ 側は警察を直接だすのはどうかと忠告していましたし、国籍問題は日韓会談に委ねる方針を定めました。そして 10 月には出入国管理令が公布され 11 月には施行されました。こうした議論が朝鮮戦争真っ最中の 1951～1952 年におこなわれていました。

こうやって見てみると、高野さんが明らかにしたこと、すなわち住民登録制度の政府案（1949～1950 年）において外登令の対象者をも含んでいたことや（208 頁）、国家地方警察側からしきりに指紋制度が提起されていたこと（203-208 頁）などは、極めて示唆に富むものとなります。先に言った外国人登録令、入管令、外国人登録法の制定過程と重ね合わせて、これらも統合的に見る視点が必要ではないかとあらためて思うのです。

この点に関わって、外国人指紋制度や外登証が、ただ「日本の植民地主義の暴力が、いまだ継続している」（216 頁）と言うだけにとどまらず、＜東アジアの冷戦＞において新しい何かが目の前に現れたものとしても同時に見る必要があるのではないかと思います。外登証に関しては協和会手帳との連続性がしばしば論じられてきたところですが、指紋を全員採るなどということは当時の朝鮮人にとって全く「新しい」できごとでもありました。それに対する反対運動も当時からあったわけですが、「指紋押捺」問題が単独でイシューになったというよりは、強制送還反対だったり、韓国に徴兵にとられるのではないかとということに対する反対であったり、あるいはさらに大枠で「米帝、吉田茂、李承晩の戦争拡大とファッショ政策」への反対（再軍備反対、破防法反対を含む）という枠のなかで、新たな指紋制度への反対運動が展開されていました。そう考えると、植民地主義の継続であると同時に、冷戦のポリティクス——正確に言えば「熱戦」を横でやっているわけですが

——そうした分断のポリティクスのなかで見る必要があるのではないのでしょうか。

こうした動きは第二次世界大戦以前のいわば *inter-imperial* な——「帝国國際的」とでも訳しましょうか——秩序の単純な延長線上にあるというよりは、*inter-imperial* な秩序の冷戦的再編の一局面とも捉えうるものだと考えます。敗戦を契機に大日本帝国が解体されることによって急激な再編が進んだ戦後東アジアは、その最前線の激戦地であったわけです。そのなかで大量の「不穏な人流」が生まれ、そこに監視技術の再装備が進み、指紋法が埋め込まれていった。こうした植民地主義と冷戦の折り重なった戦後東アジアの指紋制度への観点があってこそ、＜ポスト植民地／ポスト冷戦の現在＞——この「現在」というのはまさに 2017 年の現在ということですからけれども——が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。